

入学年度	学部	学科	組	番号	検	フリガナ
						氏名

$a$  を 1 でない正の定数とすると、 $a$  を底とする  $x$  の指数関数

$$f(x) = a^x$$

の導関数を求めたい。いま、 $x$  が  $x+h$  まで変化したときの  $f(x) = a^x$  の平均変化率を指数法則を用いて変形すると

$$\frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \frac{a^{x+h} - a^x}{h} = \frac{a^x a^h - a^x}{h} = \frac{a^x(a^h - 1)}{h} = a^x \cdot \frac{a^h - 1}{h}$$

となる。したがって

$$(1) f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} = a^x \cdot \lim_{h \rightarrow 0} \frac{a^h - 1}{h}$$

が得られる。ここで、極限

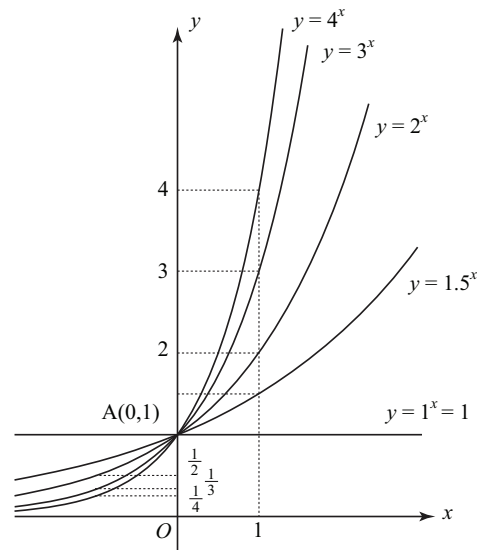
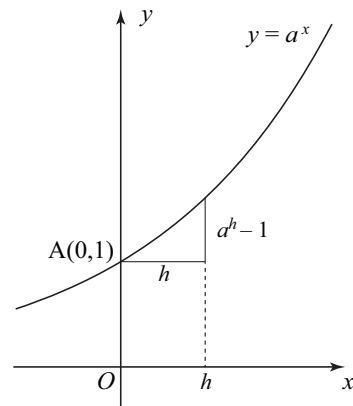
$$(2) \lim_{h \rightarrow 0} \frac{a^h - 1}{h}$$

は  $f'(0) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{a^{0+h} - a^0}{h}$  に等しく、曲線  $y = a^x$  の上の点  $A(0, 1)$  における接線の傾きにほかならない。いま、それを  $m_a$  で表すことにすれば、(1) から

$$(3) f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} = a^x \cdot m_a$$

が導かれ、 $m_a = f'(0)$  がわかれば  $f'(x)$  が計算できたことになる。

そこで、極限 (2) の値がどのようなになるかを考える。右の図を見ると、曲線  $y = a^x$  の上の点  $A(0, 1)$  における接線の傾き  $m_a$  は、 $a$  が大きくなるほど大きくなるのがわかる。そこで実験として  $a = 2$  と  $a = 3$  のときに  $\frac{a^h - 1}{h}$  の値の数値計算をしてみよう。スマートフォンの関数電卓アプリなどを用いて、右のページの表を作ってみよう。大抵のスマートフォンの関数電卓アプリでは有効数字 16 桁の計算ができるので、できる限りくわしく計算してみてほしい。



例えば  $\frac{2^{0.01} - 1}{0.01}$  を計算するには  $(2^{0.01} - 1) \times 100$  を計算すればよいので、シンプルな関数電卓（例えば iPhone の電卓アプリ）では次の順序で入力すればよい。

2 x^y . 0 1 = - 1 = × 1 0 0 =

$h$	$\frac{2^h - 1}{h}$	$\frac{3^h - 1}{h}$
0.1	0.717734625362932...	1.161231740339044...
0.01	0.695555005671881...	1.104669193785359...
0.001		
$10^{-4}$		
$10^{-5}$		
$10^{-6}$		
$10^{-7}$		
$10^{-8}$		
$10^{-9}$		
$10^{-10}$		

この表より  $\frac{2^h - 1}{h}$ ,  $\frac{3^h - 1}{h}$  はそれぞれある 0 でない一定値に近づく様子が見て取れ、その値は次のように推測できる。

$$m_2 = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2^h - 1}{h} = \boxed{\phantom{0.69}}, \quad m_3 = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{3^h - 1}{h} = \boxed{\phantom{1.10}}$$

前ページの結果を見ると  $m_2 < 1$  かつ  $m_3 > 1$  であることがわかる。したがって、2と3の間に  $m_a = 1$  となるような  $a$  の値があるだろうと考えられる。実は、 $m_a = 1$  となるような  $a$  の値は単純な有理数ではないこと知られているので、そのような数を  $e$  という文字で表し、Nepier の数とか、自然対数の底と呼ぶ。すなわち、数  $e$  は次の式をみたすような数である。

$$(4) \quad \lim_{h \rightarrow 0} \frac{e^h - 1}{h} = 1$$

すると(4)から、 $f(x) = e^x$  ならば  $f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} e^x \cdot \frac{e^h - 1}{h} = e^x \cdot 1 = e^x$  が得られる。

指数関数の  $e^x$  の導関数：  $(e^x)' = e^x$

① 指数関数と対数関数の互いには  $e^{\log a} = a$  という関係が成り立つ。これより、 $a^x = (e^{\log a})^x = e^{x \log a}$  である。そこで、 $y = e^u$ 、 $u = (\log a)x$  とおいて、合成関数の微分公式を用いて、指数関数  $a^x$  の導関数  $(a^x)'$  をもとめよ。[ヒント： $\log a$  は定数であることに注意。]

②  $f(x) = e^x$  とすると、自然対数関数  $\log x$  はその逆関数である、すなわち  $f^{-1}(x) = \log x$  である。そこで、 $f'(x) = e^x$  であることと、逆関数の微分公式を用い、 $f^{-1}(x) = \log x$  の導関数が  $\frac{1}{x}$  であること、すなわち  $(\log x)' = \frac{1}{x}$  であることを示せ。

③ 前問によれば、 $f(x) = \log x$  としたとき、 $f'(1) = \frac{1}{1} = 1$  となることがわかる。一方、

$$f'(1) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\log(1+h) - \log 1}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \left( \frac{1}{h} \log(1+h) \right) = \lim_{h \rightarrow 0} \left( \log(1+h)^{\frac{1}{h}} \right) = \log \left( \lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}} \right)$$

である。(最後の等号は  $\log$  が連続関数なので  $\log$  と  $\lim$  の順序が入れ替えらることによる。) よって、

$$f'(1) = \log \left( \lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}} \right) = 1$$

となり、 $\lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}}$  は  $\log$  をとると1になるような値、すなわち、

$$\lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}} = e$$

となる。そこで、次の表を用い  $(1+h)^{\frac{1}{h}}$  の値を計算してみよう。 $h = 1, 0.1, 0.01, 0.001, \dots, 10^{-9}$  として関数電卓を用いて  $(1+h)^{\frac{1}{h}}$  を計算し、表の空欄を埋め、極限值  $\lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}}$  の値を推測せよ。

$h$	$(1+h)^{\frac{1}{h}}$
0.1	2.5937424601
0.01	2.70481382941526...
0.001	.
$10^{-4}$	.
$10^{-5}$	.
$10^{-6}$	.
$10^{-7}$	.
$10^{-8}$	.
$10^{-9}$	.
↓	↓
0	.

これより、 $e = \boxed{\quad}$  と推測される。